

立命館大学 人間科学研究所報

第 2 号

目 次

2001年度人間科学研究所運営委員会と プロジェクト・課題別研究会の紹介	1
人間科学研究所研究会開催報告	
2000年度 プロジェクト研究報告	2
2000年度 課題別共同研究会報告	8
2000年度研究所日誌	11

2001年度 人間科学研究所 運営委員会

所 長		松田 隆夫	文学部教授
専任研究員		中村 正	産業社会学部助教授
運営委員会	紀要編集委員	望月 昭	文学部教授
	紀要編集委員	池田 善昭	文学部教授
	紀要編集委員	中川 勝雄	産業社会学部教授
		高木 和子	文学部教授
		(前期)土田 宣明	文学部助教授
		(後期)東山 篤規	文学部教授
		山本 忠	法学部助教授

2001年度 人間科学研究所
プロジェクト・課題別共同研究会

プロジェクト

	プロジェクト	代表者
A 1	対人援助学(コアプロジェクト)	望月 昭(文学部教授)
B 1	個人史の事例	池田 善昭(文学部教授)

課題別共同研究会

研究会名	代表者
人格発達と教育研究会	高垣 忠一郎(産業社会学部教授)
発達相談・発達援助研究会	荒木 穂積(産業社会学部教授)

人間科学研究所は2000年度より、私立大学学術フロンティア推進拠点の指定を受け、「対人援助のための『人間環境デザイン』に関する総合研究プロジェクト」を実践しています。上記A1プロジェクト研究(コアプロジェクト)及びほかの学術フロンティア各プロジェクト研究については、次号の所報にてご紹介する予定です。

2000年度 プロジェクト研究報告

(2000.4.1~2001.3.31)

プロジェクトB
 ヒューマンサービス/対人援助学
 代表者 望月 昭(文)

第1回研究会(2000.10.28)

テーマ:「福祉情報ネットワークの構築:

立ち上げと運用に関する諸課題」

報告者:金子 尚弘(白梅女子短期大学教授)

今回の研究会では、福祉・教育関係の情報プラットフォームの構築および運営に関する具体的な課題について、この数年間、実際に教育機関(大学)を中心に作業を継続してきた金子尚弘氏に話題提供してもらい討論を行った。学外からは、学会などをライブでネット配信するといった試みを行っている鳴門教育大学の島宗氏を招き、ネット上での様々な可能性についても議論を重ねた。

話題の内容は、まず数々のデータベースが既に流通している現状の中で、新たなネットワークを立ち上げる場合の、社会的ニーズを持った情報コンテンツの質の問題が提起された。金子氏によれば、情報内容の「可塑性」が高く、「専有性」と「流通性」が低いものが、新たなデータベースとして価値のあるもの、という結論であった。さらに具体的なデータベースの情報提供の在り方としては、明確な目的性やテーマを持ったヒューマンネットワークが不可欠であること、またそうした情報収集の核として、教育

組織(大学)は、必要とあれば情報リテラシーの作業を行う必要があったこと、さらに多様な入力形態に対応できるフォーマットの整備を行う必要があるなどの具体的な課題が紹介された。

今回の研究会は、立命館大学における学術ボランティア(「対人援助のための人間環境デザイン」)における「コア・プロジェクト」の情報プラットフォームの構築や運営についても、極めて具体的な課題分析の方法が提供されたと言えるよう。

【望月 昭(文学部教授)】

第2回研究会(2000.11.25)

テーマ:「利用者と援助者を支える仕組み:

福祉現場から」

報告者:織田 智志

(愛知県コロニーはるひ台学園)

松原 平 (北九州市小池学園)

居住施設における知的障害のある成人を対象として、そのQOL向上のための実践作業の現状、そしてそうした作業を行う職員の行動をどのような形で援助していくべきかについて実践的研究者(Scientist-Practitioner)からの研究報告を得た。織田氏からは、強度行動障害への対処について、本人の行動選択肢拡大という「行動的QOL」の拡大を戦略とした実践を通じてこのような「新しい試み」を定着させるための「社会的強化」の必要性が主張された。松原氏からは、利用者本人の要求行動実現に必要な環境設

定の機能、そして実践内容を外部的に評価することなどを通じて生活改善を維持する「逆援護」の機能についての実証的な検討が報告された。本人の生活の質を高め、しかも援助者のプロアクティブな実践行動をも正の強化で維持するためのシステムの必要性が示され、学フロにおける情報プラットフォームに期待される機能の本質が浮かび上がった。

【望月 昭（文学部教授）】

第3回研究会（2000.12.3）

テーマ：『基礎心理学の応用性』

（第19回日本基礎心理学会との共催）

「心理学と法学：モード論を補助線に」

「心理学と経済学：実験科学のもう1つの道」

「心理学と地理学：

関心と手法からみた相違と接点」

報告者： 佐藤 達哉（福島大学）

坂上 貴之（慶應義塾大学）

山本 利和（大阪教育大学）

当研究会は、基礎心理学会と共催で公開シンポジウムの形で行われた。心理学の研究者である発言者3名から、それぞれ異なる領域との連携の現状と展望について紹介があった。佐藤氏からは、目撃証言などの問題に絡み、法廷審議の場における法学との「異文化接触」の実例が示された。そのような場における共同作業を通じて、モード（学融）的作業におけるモード（既存のディシプリン）の再確認、再定位の重要性が提起された。坂上氏は、経済学における無差別曲線理論と心理学における反応遮断化理論とを照合し、相互の関係や補完的役割について論じた。心理学への展望として、実験パラダイムとしての「ゲーム」、行動の理論としての

「最適化理論」の構築、などが想定され、また経済学に対しては実証ベースでの検討の方法を提供できることが示された。山本氏は、「空間」を巡っての心理学と地理学とのコラボレーションの現状を、最近の著作や学会の動向から紹介し、それぞれの立場の相違や個性を認め合うことの重要性を示した。

【望月 昭（文学部教授）】

プロジェクトB

個人史の事例

代表者 池田 善昭（文）

第1回研究会(2000.5.19)

テーマ：プロジェクトについての打ち合わせ会

まず研究代表者池田教授より、西田幾多郎のライフヒストリーにおける思想形成という本プロジェクトの趣旨が説明された。ライフヒストリーによる個人事例研究は近年文化人類学で成果顕著な手法であるが、思想研究においても同様に、従来のように哲学史から哲学者を見るのではなく、逆に個人の特殊環境の中で思想が作られていく姿を内側から追跡する作業が、その思想の生きた理解には必要である。いわゆる西田哲学の「難しさ」は、外から眺められてきたことに起因するのではないか。このような見通しのもと、西田の個人史における思想形成を哲学・心理学・教育学・倫理学・比較思想・仏教学・人間学の各方面から学際的に研究する共同研究の分担について意思統一が行われ、2002年度に成果を論文にまとめることが確認された。

【福井 雅美（文学部非常勤講師）】

第2回研究会 (2000.10.27)

テーマ：ライフヒストリーの基本概念について
報告者：池田 善昭 (文学部教授)

本プロジェクトが個人史の事例研究において問題とする「ライフヒストリー」の概念について、報告者より次のような内容の発表が行われた。第一に、誰をも圧する人生の苛酷さはその一回性、不可逆性にある。だが、我々がくり返し学ぶべき何らかの意味をそこに見いだし付与することで、それは「時」の制約を超えたものとなりうる。こうして現在の我々に学ばれるものがライフヒストリーである。しかし第二に、それは従来の偉人伝や英雄伝の類に見られるような安易な理想化・客体化であってはならない。したがって第三に近代主義の主観 - 客観図式を超え、個 - 全体という脱近代的図式が採られるべきである。我々は、モナドとしての個の中に世界のリアルな相が姿を現すのを見るのであり、人物研究は世界存在の仕組みへの洞察へ到る。

【福井 雅美 (文学部非常勤講師)】

第3回研究会 (2000.12.21)

テーマ：西田 幾多郎 金沢時代の足跡
報告者：福井 雅美 (文学部非常勤講師)

西田前半生の地、すなわち出生地石川県宇ノ気町、および勉学と教師生活の地金沢市における資料調査をもとに研究報告を行った。ライフヒストリー研究とは個人の人生の中にその時代の社会の普遍的精神を見るものであるが、旧加賀藩の経済的繁栄を背景に高度な教育の伝統を有しながらも、旧幕藩体制下での繁栄ゆえに明治維新のひずみをさまざまな形で受けた金沢は、西田の思想形成に大きな役割を果たしたといえ

る。第四高等学校において、学生としては官制教育に反発し、鈴木大拙らと生涯の親交を結び、また教師としては軍国日本にシビアな目を注ぎ、公私両面でトラブルに悩みつつも『善の研究』の構想を固めていった。のち京大退官に際し自ら回想するように、金沢の四高時代は哲学者西田を生む上で最もよき時であったといえよう。

【福井 雅美 (文学部非常勤講師)】

第4回研究会 (2001.2.16)

テーマ：西田 幾多郎における「存在 - 論理」
西欧論理と対比しながら
報告者：西川 富雄 (立命館大学名誉教授)

西田哲学が明治以降の近代日本が生んだ独創の哲学であることを否む人はまずはない。しかしその西田を、日本の戦後思想史はかならずしも公正に客観化しているとはいえない。私はかねて、その「存在 - 論理」において、西欧の存在論的伝統とつきあわせてみても、西田はなんら遜色のないすぐれたものであるという見方をとってきた。「論理」とは「実在の自己表現のかたち」であり、彼の『善の研究』以来生涯をかけてその「かたち」を「存ルコト」の真実相に求められてきた。その途上において、彼が西欧哲学者の実在把握の論理といかに格闘し対決してきたかを検討することが、ここでの研究である。

報告後「絶対無の論理」がどこまでコトバ化できるか、言説を超えるとすれば、なお論理化する「論理」とはいかなるものかが集中的に論議された。

【西川 富雄 (立命館大学名誉教授)】

プロジェクトB
争点としての生命
代表者 遠藤 彰(理工)

第1回研究会 (2000.5.16)

テーマ：研究会の方針と今後の進め方について

《生命》をめぐる諸問題について、さまざまな領域からのアプローチを試み、互いの接点を探りながら、論点＝争点を明確にしていく。今回は本研究会の進め方について、意見交換をした。とりわけ、現在進行中の「新大学院構想」のコア・エッセンスのテーマの一つである生命は、より具体的にリサーチ・プログラムとしてどのように展開できるのか という課題を抱えている。研究会は、この点に留意しながら進める必要がある。会のメンバーの専門領域は多岐にわたるが、積極的に領域をクロス・オーバーし、また新たなメンバーも追加しながら、まずは可能なところから自由な討論を通して、議論の輪を拡げ、争点そのものを浮上させることが肝要である。

【遠藤 彰(理工学部教授)】

第2回研究会 (2000.9.12)

テーマ：研究会の方針と今後の進め方について
 (2)

生命をめぐる争点が奈辺にあるのか。今回は、生物学・心理学・人類学、文化論的な領域から、自己紹介も含めて短い報告を受け、フリーな意見交換をした。生物多様性の認識・言説を歴史的に探り、現代生物学(遺伝系統)と生態学などの位相・エピステーメを解明する試み。

心理学周辺での ethics、人の暮らしの原点の確認、生命認識における新しい課題。認知科学と脳科学関連領域で、脳の感覚情報処理のしくみの解明、AL - AI の批判的評価。近年の nature / nurture 論争、遺伝子中心的発想の背景分析、“Science War”をめぐる問題など自然 - 文化の統一理解のあり方。生物学と歴史の狭間にある人類学史の批判的再検討、19世紀優生学の形成の社会思想的分析。種概念、identification をめぐる問題、等々多くの問題群が浮上し、活発に論議された。

【遠藤 彰(理工学部教授)】

第3回研究会 (2000.10.6)

テーマ：Natural History (博物学) のエピステーメ
 テーマ：M. Foucault 『言葉と物』をめぐって

報告者：遠藤 彰(理工学部教授)

Foucault の『言葉と物』は、従来の生物学史の常識 17～18Cの博物学の興隆から 19Cの「進化論」が誕生したという「遡及主義」的な理解に風穴をあけた。博物学と進化論はまったく異なったエピステーメに属しており、この転換を可能にしたのは、G. Cuvier の動物比較解剖学の実証的な相関原理であり、これが生命＝有機体の新しい概念を創出し、その有機体の内的な変化の論理として進化論が可能になったこと。報告者は、この議論の経緯を紹介しながら、現代の生命・多様性概念をめぐる「背後の」エピステーメを探る作業を今後の課題として指摘した。

Foucault の考古学的分析の有効性や、観念史的なアプローチの可能性などが少し議論され、今後、関連分野での学史の検討などの重要性に

についても意見交換された。

【遠藤 彰（理工学部教授）】

第4回研究会(2000.10.27)

テーマ：「Constructivism と生命 / 科学 / 論」

報告者：吉岡 公美子（法学部助教授）

金森修は『サイエンス・ウォーズ』で、古典的な基盤主義的实在論と社会構成主義（social constructivism）の対立を描いてみせたが、じつは後者には世界認識をまったく異にする2つのグループが一括りにされている。「科学のカルチュラル・スタディーズ」などの“social constructionism”と、B・ラトゥール（科学人類学）や Susan Oyama (Developmental Systems Theory) が標榜する“Constructivism”を峻別することが必要である。そうすれば、1990年代における「社会構成主義の停滞」という金森の分析がかならずしも妥当ではないことがわかるだろう。

科学を社会の函数ととらえる“social constructionism”の立場は、科学的現実の恣意性（arbitrariness）を述べたてる唯名論や、悪平等主義的相対主義に陥ることが危惧される。これに対し動態論的实在論に立脚するConstructivismは、社会と科学、自然と文化のcontingentな関係をより精緻にとらえることのできる枠組みを有している。

【吉岡 公美子（法学部助教授）】

第5回研究会（2000.11.17）

テーマ：『ジェンダー／セクシュアリティ』

から

報告者：田崎 英明（文学部非常勤講師）

田崎の著書『ジェンダー／セクシュアリティ』（岩波書店刊）では、フーコー、ドゥルーズ、アガンベンなどの議論をふまえて、生命の政治としてのバイオポリティクスや出来事存在論としてのポテンシャルティ論などが展開されているが、今回は、ポテンシャルティ／アクチュアリティという対概念と生命の問題が中心的に論じられた。「戦争」や「虐殺」などの「出来事」が存在するというのはどのような意味においてなのかを探究することと、生命とは何かを考えることは、「アフォーダンス」の概念に見られるように、生命をポテンシャルティとのかかわりでとらえることで連続させられる。そこにポジティブな概念としての生・政治の可能性もかかっているといえるだろう。

【田崎 英明（文学部非常勤講師）】

第6回研究会（2000.12.15）

テーマ：殺生、肉食、動物 なぜ動物を殺してもかまわないのか？

報告者：中島 隆博

（東京大学総合文化研究科助教授）

発表要旨：

1. 「殺生を戒める道理などない」

なぜ動物を殺してもかまわないのか？論争の核心にあるこの問いは、同時に、肉を食らうことの倫理をどう考えるのかという問題と不可分である。「殺生を戒める道理などない」。こう断じたマテオ・リッチが伝道した、同時代の中国の思想界は、倫理的な根拠を超越的な規範に求めることを断念しながらも、しかし人間の倫理を再構築するために、食べることに代表される人間の自然的な欲望を捉え直そうとしていた。だが、実に単純なことながら、食べるには、殺さなければならない。肉を口に頬張り味わう剥

それは、極度に自己充足した瞬間であるが、そこから距離を取り、欲望の根底に至ろうとする限り、殺生を等閑視するわけにはいかない。キリスト教徒と仏教徒との間に交わされた「戒殺生」をめぐる論争は、ここに定位していたのである。

2. 動物の位置：魂のヒエラルキー

争点となった殺生は、しかし、動物を殺すことであって、人間を殺すことではなかった。仏教徒側の言い分では、殺生を戒めるのは、動物が人間と同様の存在者だからである。ところが、リッチにとって、人間と動物の差異をこのように無にすることは、人間を頂点とする魂のヒエラルキーを無効にすることであって、受け入れられるものではなかった。動物は人間のために創造されたのであって、「財貨」のように「使い方に節度があれば十分である」(『天主実義』第五篇)。したがって、人間と動物の間には、相互性が成り立たないから(つまり「仁の模範」は適用されない)動物は殺してもかまわないのである。

3. 「忍びざる心」と憐れみ

それに対して、仏教徒側から反論があり、主なものとして、一つは、人間の中にも動物のように使役されている人々があり、彼らに対しては動物に対するのと同様の仕打ちがなされてしまいかねないというものであった。もう一つは、「忍びざる心」を人間は持っていて、動物や子供が危殆に瀕したときに、突然それが生じてしまうことを、リッチは捉え損なっているというものであった。この「忍びざる心」は、ヨーロッパで議論された「憐れみ」(とりわけルソー的な)とは違い、他者を自己に還元するものではない。それはかえって他者から到来するもので、「反応 re-action」もしくは「情動 e-motion」とでも呼ぶべきもの、そしてあらゆる利害関心や

反省を逃れるものである。言い換えれば、自己の手前であって、そこから自己と他者が分節されてくるような、原・根源的な触発の内在性である。したがって、動物は殺してもかまわない、人は殺してはならないと論じるリッチの議論は、この内在性を抑圧することで成り立っていることになる。

4. 「正しく食べなければならない」

とはいえ、それでも人はいずれにせよ食べるのであり、実際にも象徴的にも動物をそして人間を食べている。いったいここでいかなる倫理が、考察されうるのだろうか? そのヒントとして、ジャック・デリダの次の言葉を考えてみる。

「如何にして美味しく = 正しく食べるべきなのか?」それが、決して一人で食べることではないと言われるとき、まったく別の共同性と倫理が遙かに構想されているのだろう。しかし、それはこの瞬間での個々の判断を通じてかろうじて紡ぎ出される類のものである。最後に、もう一つ別の言葉を。「他者のために」は、たとえばパンを味わう口からパンを引き剥がし、それを他人に与える際に生起する。享受のうちで結晶した<自我>の核がこのとき崩壊するのだ」(エマニュエル・レヴィナス『存在すとは別の仕方で』)。

【中島 隆博

(東京大学総合文化研究科助教授)】

2000年度 課題別共同研究会報告

(2000.4.1~2001.3.31)

人格発達と教育研究会

代表者 櫻谷 眞理子(産)

第1回研究会(2000.5.19)

テーマ：中学生の自立をめぐる葛藤について
報告者：中坊 伸子(立命館中・高養護教諭)

拒食症や自殺企図などの問題を抱える子どもが増えているが、問題の子どもを発見しても家族の理解を得ることが難しいケースも多い。親に子どもの状態を伝えることで、親と子の緊張関係がより強まる場合もある。思春期の子どもたちがつまずき、迷いながら成長するというプロセスを温かく見守る寛容さや余裕を大人の方が失いつつあるのではという印象を持つ事例であった。しかし、養護教諭と担任が連携し、ここから安心できる環境を整え、子どもを包み込むことで、自らの力で立ち直っていくことが示されており、この時期の子どもと接する大人としてのあり方を考えさせられた。

【櫻谷 眞理子(産業社会学部助教授)】

第2回研究会(2000.10.20)

テーマ：保健室からみえる中学生のこころの問題
報告者：伊藤 真里子(中学校教諭)

中学校での荒れやいじめについての生々しい

報告がなされた。問題を起こす子どもたちも、家庭での居場所が無いのか学校へは休まずに来て、教員がかまってくれることを望んでいる。いじめられる子ども、いじめられる子ども双方とも援助を必要としているのだが、まるで戦場と化した状態に教員が対応しきれずにいる。

何故、子どもたちがこれほど不安を抱き、思春期危機の中で、逸脱行動を繰り返すのかといったことに議論が集中した。話題提供を行った伊藤先生は保健室に避難してくる子どもたちを受け止め、援助の手を差し伸べようとしているのだが、子どもの言葉にふりまわされたり、子どものこころの内を理解していなかったことに気づかされたと述べていた。このような実践記録に基づき、職種の異なる者の目で検討することが問題の理解を深めることにつながっている。

【櫻谷 眞理子(産業社会学部助教授)】

第3回研究会(2000.12.19)

テーマ：インドの旅と心理臨床
報告者：高垣 忠一郎(産業社会学部教授)

インドという国を自分の臨床家としての生きざまを通じて理解し、心理臨床の神髄にせまるような話を聞いた参加者一同思わず高垣氏の語りに魅せられてしまった。インドという国は生と死が隣り合わせの国で、人間の欲望と情念が渦巻きながら聖なるものへとつながっていく不思議な世界であることをかいま見ることでもでき

た。

人間存在をどう捉えるのか、人は何を求めて生きているのか、そういった問いかけなしに、人とかかわる仕事を安易に行ってはいけないのではないかと思った。高垣氏の心象風景を描いた絵の紹介もなされたが、心理臨床の道にすすむ者たちのために、文章としてもまとめてほしいと誰もが願うような深い内容の講演であった。

【櫻谷 眞理子（産業社会学部助教授）】

発達相談・発達援助研究会

代表者 荒木 穂積（産）

第1回研究会(2000.10.6)

テーマ：自閉症児の自我発達について

報告者：赤木 和重（滋賀大学大学院生）

自閉症児の自我発達の過程をルージュ課題（口紅）を用いて分析した結果を中心に報告してもらった。

自分の顔に塗られたルージュを、鏡を通して見た時、通常の場合は1歳半ごろになると、鏡にではなく自分の顔に手をやるという動作がみられる。自閉症児の場合は、若干おくれてこのような動作がみられるが、困難をしめす子どもも少なくない。

自分を見つめる（鏡像理解）と自分理解との間には関係が深いのではないかという興味深い報告であった。実験結果とともに事例報告もなされた。

【荒木 穂積（産業社会学部教授）】

第2回研究会(2001.2.7)

テーマ：自閉症児の遊び場面にみられる

要求表現

報告者：早川 千晴（社会学研究科）

今回の報告は、K市療育教室に通うYくんの遊び場面での要求表現の様子をビデオ記録し、分析したものであった。

指さしはまだでないが、手差しや目線の動きから第3者を介した関係が形成されつつある様子がビデオにリアルにとらえられていた。

Yくんの発達診断結果ともつき合わせながら今後の指導課題について論議した。話しことば獲得期の発達の具体的姿が今後も継続して把握できることが期待される。

また、行動を単位として把握することの重要性、参加観察法を用いるときの留意点などについても意見交換がなされた。

【荒木 穂積（産業社会学部教授）】

第3回研究会(2001.3.12)

テーマ：4歳児の発達診断の実際について

報告者：立田 幸代子（社会学研究科）

4歳児の事例を紹介したVTRを視聴し意見交換をおこなった。

4歳の発達の質的転換期である2次元可逆操作の獲得から充実へのプロセスをAyaの事例を通して検討した。特に、積木構成課題にみられる対称性の変化が論点となった。

また、2次元可逆操作期の「こだわり」や「がんこさ」の発達の意味をどう考えるかが論議となった。

4歳児の心の内面で自己調整が働いていることを前提としつつも、そのプロセスにみられる

対称性原理が「こだわり」や「がんこさ」をつくりだしているのかもしれない。教育的には内面の充実をしっかりとさせるためにも、その“ゆれ”につきあったり、向き合ったりする必要があるのかもしれないなどが指摘された。

【荒木 穂積（産業社会学部教授）】

2000年度 研究所日誌 (2000.4.1 ~ 2001.3.31)

4月

- 25 代表者会議————— (第1回 / 修学館プロジェクト研究室)

5月

- 16 プロジェクトB 研究会————— (第1回 / 修学館共同研究会室)
 19 プロジェクトB 研究会————— (第1回 / 修学館プロジェクト研究室)
 課題別 人格発達と教育研究会————— (第1回 / 平安女学院中・高会議室)

7月

- 4 運営委員会————— (第1回 / 修学館共同研究会室)
 25 運営委員会————— (第2回 / 修学館共同研究会室)

9月

- 20 プロジェクトB 研究会————— (第2回 / 修学館共同研究会室)

10月

- 6 プロジェクトB 研究会————— (第3回 / 修学館共同研究会室)
 課題別 発達相談・発達援助研究会————— (第1回 / 子どもプラザ)
 17 運営委員会————— (第3回 / 修学館共同研究会室)
 20 課題別 人格発達と教育研究会————— (第2回 / 平安女学院中・高会議室)
 27 プロジェクトB 研究会————— (第4回 / 修学館共同研究会室)
 プロジェクトB 研究会————— (第2回 / 修学館共同研究会室)
 28 プロジェクトB 研究会————— (第1回 / 啓明館4F)

11月

- 17 プロジェクトB 研究会————— (第5回 / 修学館研究会室)
25 プロジェクトB 研究会————— (第2回 / 末川記念会館会議室)

12月

- 3 プロジェクトB 研究会————— (第3回 / 中野記念ホール)
12 運営委員会————— (第4回 / 修学館共同研究会室)
15 プロジェクトB 研究会————— (第6回 / 修学館研究会室)
19 課題別 人格発達と教育研究会————— (第3回 / 平安女学院中・高会議室)
21 プロジェクトB 研究会————— (第3回 / 修学館共同研究会室)

2月

- 7 課題別 発達相談・発達援助研究会————— (第2回 / 修学館共同研究会室)
16 プロジェクトB 研究会————— (第4回 / 修学館共同研究会室)

3月

- 6 運営委員会————— (第5回 / 修学館共同研究会室)
12 課題別 発達相談・発達援助研究会————— (第3回 / 修学館共同研究会室)

当研究所では、教職員のみなさまからの所報掲載の原稿を歓迎しています。

立命館大学 人間科学研究所報 第2号

発行日 2001年3月

編集・発行 〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学 人間科学研究所

TEL 075-465-1111(代表) 内線2558

FAX 075-465-8245 内線2544
